
in blue

bluewind

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

in blue

【Nコード】

N9230I

【作者名】

bluewind

【あらすじ】

その村は、青と、緑と、光り輝く白で描かれている。空は深く何処までも広がり、その色を映した大きな湖もまた深く暗い。そして湖を囲むように……濃い緑が幾重にも茂る……山がグルリと連なり、雄雄しくそそり立っている。

- - - - -

青、青だ、この世界は青だ、全ての色の基は青で出来ている。
青はいつまでも、仄かに輝き続けている

01：湖々学校（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

01：湖の学校

その村は、青と、緑と、光り輝く白で描かれている。空は深く何処までも広がり、その色を映した大きな湖もまた深く暗い。そして湖を囲むように……濃い緑が幾重にも茂る……山がグルリと連なり、雄雄しくそそり立っている。

太陽はいつも熱く照り、陽炎で景色は揺らぐ……濃淡が微妙に重なり合って混じったりする。

ベタリと厚く塗りたくられた絵のように、静かな所。その絵はいつも生きていて、変化し続けている。地に這う小さな小さな虫の手足や殻の動きのように、微細に、緩慢に、しかし確実に絶えず動き続けている。

でも、その世界の全ては、そこにあるもので全てであり、空があつて、湖があつて、山があつて……そしてそこに棲む人たちがいるだけだった。

畔の先に平屋の学校があつて、屋根はベタリと……犬がうだり寝そべっているように低い。壁は茶黒く煤けていて、ちょうど地面の土の色合いと馴染んで、そこに生まれた時からずっと生え育ち、伸びているように在る。窓は黒くほのかに中の物の影を映すだけで、その内ははつきり窺えない。それはまるで身体の中の臓腑のような……椅子とか机とかの形が、一番外側の輪郭だけが分かるだけだった。

皆、一緒になって湖まで歩いていく。その固まりは勝手気ままに形を変えながら……でも一緒になって道をずっと歩いてくる。

裸足の子もいれば、服を全く着ていない素裸の子もいる、手や足の無い子もいれば、目鼻が無い子もいる。皆、少しもジツとしていられない子達ばかりみたいで、はしゃいで跳ねたり、急に駆け足し

たり、やりたいままに愉快そうに騒いでいる。

その影のような皆の中に混じって、一人の女の子と一緒に歩いていた。何故その子が“一人の”とあえて言うのは、彼女だけが輝くような白いドレスを着ていて、襟や袖の先を綺麗に真っ直ぐ整えていた。歩き方も地面を擦るような足の運びで静かに、両手を重ねて軽く握りながら、ただ静かに押し黙るようにして、皆の輪の中に入って歩いていた。

そして彼女を入れた“皆”は、次々に学校の門をくぐって、入り口の扉をくぐって、教室へと入っていった。

そこには机も椅子も何も無く、広い空っぽの木の部屋だった。くすんだ茶色い木の床が、皆の踏み足で軋む。黒板の下の辺りだけは少し上がった段になっていて……そこに地味な着物を着たお婆さんがあぐらをかいで座っている。頭には黒っぽい煤けた頭巾を、両腕を交差させて、それぞれ反対の袖の中にしまい込み、小さい岩のようにジッと固まっている。

教室の窓は眩しい、キラキラと目に痛いくらいに輝いているのに、教室の中は暗くて光が入ってこない。

皆、お婆さんの前に囲むように、それぞれ床に座り込んで、女の子だけは少し余所余所しそうに後ろの方に座って、皆を、お婆さんを見つめる。

シンー……、しばらく沈黙を作ってから、お婆さんは一人喋り出した。

「夫婦は子供が出来なかった。殊に妻の方は悲しんだ。毎日拝んだし、身体に気を付けて夫に助けてもらい、授かることを願っていた。でも兆しも見られることが無かった。

しかしある日の夕刻、二人は一緒に散歩から帰ってくると、玄関に布に包まれた赤ん坊が一人で泣いていた。妻は驚いて駆け寄り、抱き上げた。多少痩せていたが、丈夫そうな赤い顔付きと、しっか

りした泣き声をあげる子だった。

誰かが捨てていったのか、分からないが、妻はその子を自分の子供にしようと言った。夫は黙って頷いた」

そして、お婆さんはそれで、口を噤んでしまう。またちよつとだけの沈黙。そしてそれで、皆も満足したように笑みをみせて立ち上がり、教室を出て行ってしまう。最後には女の子が一人、いつも一人教室に残って座っていて、お婆さんから続きが話されるのを待っている。

お婆さんの姿はほとんど影の中に入り込んでしまい、姿形がかすかに見えるだけ。今はもうまるで本物の岩と見分けがつかない。

女の子は、動けない。少しでも動いてしまうと……今、女の子が前の方をよく見ようと背伸びをただけで、いつの間にかお婆さんの影は、初めから無かったかのようにそこから消えてしまう。このいつもの小話の答えは、目の前にはつきりと現れることがないまま、お婆さんが消え去ってしまう様と同じように、分からないままに無くなってしまう。

気付いたら、空っぽの教壇、空っぽの教室の中に、自分一人だけが居るだけだった。窓の光は黄色くて褪せていて、もう柔らかく弱い。

太陽が傾き出す夕方、まだ地面は明るくて白い土が光っているけれど、辺りには緩くとりけた空気が流れている。

学校を出て裏側を、ちよつと草むらを踏み分けていけば湖に着く。眠たくなるような湖の水面の、緩いきらめき。その柔い光の中を、皆が泳いでいる。その黒い影は相変わらず元気そうに跳ねたり、素早く右に左に行ったり、好き好きにはしゃいでいる。

女の子はその皆の姿を見ながら、一人、岸に低く生える一本の木のそばに寄る。そしてまたれ掛けながら、ゆっくり腰を下ろす。少し袖のよれをを直したり、頬の汗を指で拭いたりして落ち着いてか

ら、静かに皆の姿を見つめている。

光の波の中にもぐったり、その上を駆けたり。光を背にしてくつきりと皆の影が見える。二人が一人になったり、一人が三人になったり、消えて、増えて、また消えて、また増えて、また、また、また……

ずっと見ていて、暑さのことを忘れてしまう。いつの間にか日は暮れて、この山に囲まれた地の中に暗闇がたつぷりと流し込まれる。すると皆の影は、今度はかえって薄っすらぼんやり灯る影となって、浮かび上がってくる。湖から上がってきて、皆が木の周りに集まる。そして、今日はもうこれでさようならと、伝え合う。湖に、学校に、皆に、さようなら。さようなら。

02：毎日、問答、疑問、進む（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

02：毎日、問答、疑問、進む

毎日、毎日、暑い日が続く。

太陽が上つていき、陽炎は一層、まるで煙のように、熱気がもうもうと湧き上がる。緑や青の色が溶けているかのような、木の葉の揺らぎや、湖のさざなみ。いつも変わらず原色は輝いていて、草々、小石、木々、雲、風、土、それぞれいつもの位置、いつもの場所に在る。

しかし少女は、そこに無いものを、いつも探していた。鳥や虫、魚や犬、猫……彼らをどれだけ探してみても、決して見つけられることは無かった。

何も変わらず、何も変わらず、全てが現れては過ぎていき、また現れては過ぎていく。

皆と一緒に、暑い道を歩いて学校に行き、皆と一緒に、学校へ教室へ入り、お婆さんの短いお話を聞くと、また皆と一緒に学校を出て、湖へと向かい、皆と一緒に時間を過ごして、最後に夕闇の中でお別れを言う。この日も、この日も、この日も……

その中でも、しかし確実に変わっていくものがあっても、でもそれに気付くことは無いままに、一日、また一日と過ぎる。

いつものお婆さんのお話が始まるうとしていた。さっきまで騒いでいたのが次第に静かになっていって、様子を見計らって話し始めた。

「仲のいい双子がいた。二人は何でも似ていた。姿は勿論、声も、言うことも、思うことも、」

「お婆さん、私、一人ぼっちの子犬を見掛けました」

お婆さんは口をつぐみ、しばらく二人は……その時だけその暗い

空間は二人だけになって……ジツと見つめあつた。お婆さんの顔は相変わらず陰に隠れて輪郭ぐらいしか分からず、しかし反対に少女の顔は、窓から漏れた一筋の光が、額をかすつてわずかに光った。「さつき学校に来るときに、裏手の方の草むらの中で何か動いていたんです。多分毛が光つて……子犬でした」

少女の高鳴りは、次第に彼女自身を内側から圧し始めてきて、その場に立っているだけでも苦しくなってきた。顔に当たった光が熱い。汗が……滴っている。

「それで、その子犬はどうなった？」

いつも語るだけで、終わったらいつの間にか消えてしまうお婆さんが、初めて少女自身に向けて言葉を語り掛けた。

「その子は湖の周りをグルリと回って行って、山の奥の方に行つてしまいました。お婆さん、あの山の向こうには何があるんですか？」

お婆さんならきつと知っているんじゃないんですか？」

お婆さんの顔がわずかに横に傾いで、目をそらしたように見えた。「行きたいのなら、行けばいいがな、見たいのなら、見ればいいがな。わしは、それ以上は何も言わん。望むならば、立ち止まることはせず、求め続けな」

そしてお婆さんの姿影は、またいつものように消えてしまった。

そして皆の姿も、もうどこにもいなかった。窓の外を見ても、静かな穏やかな湖が、波も立てず、白く目眩がするほどに輝いているだけだった。なお一層、今いるところが濃く暗いことを思い起こされるばかりで。

外に出た途端に、カツと顔に照る太陽が余りに熱くて、思わず一度ひさしの下に隠れた。空の太陽を見上げてみると、ほの赤い白熱球の中で、グルグルと灼熱の波が渦を巻いている。熱い。暑い。

太陽に焼かれて、これまでにないほどに、地は燃えていた。高い

空の向こうから激しい熱気を当てられて、大気や雑草や土や湖は熱せられ、全てが沸き出しそうに猛り躍っているようだ。

外には皆……誰もいない。いやこんなところにいたら、どうかなってしまいそう。でも、行かなくてはならないと、思う。

全て、嘘だった。子犬を見たこと……今日もいつものように皆と一緒に、いつもの道をいつものように辿って学校へ行った。何も無かった。

何もかもがいつもと同じ。

何か、何か、何、何、何なのだろう、何、何、私は何、ここは何、何なのだろう、一体、私は何で、私は何のためにここに居て、私は……何処へ行こうとしているのだろう。そんな、疑問が……初めて心の中にふと芽生えた。“皆”とは……何？

太陽の光に下に、足を踏み出すのが恐かった。たった一歩、それで私の体は蒸発してしまうのではないかという幻想を抱く。私は、私自身というのを疑っていた。怖い。こんな時、“皆”がいてくれれば、どんなに心強いだろう。皆、何処にいるのだろう、何処に行ってしまったのだろうか。

目をつむって、一歩、一歩進んだ。ユラリ、ユラリと体が揺れる、景色が揺れる。たった一歩で、数歩が進む、滑るように、泳ぐように。

校舎の裏側を通って、すぐに湖の際に出た。青い湖を見た途端、ホツと心から深く息を吐いた。青色を見ただけですつと気持ちが悪くなった。

記憶が……“記憶”というものが“有る”ことに初めて気付いた……蘇る。転がる小石、草の一本一本の傾き具合、水面の揺らぎきらめき、土のにおい、全てが一緒だった。前も、その前も、その更に前も、ずっとずっと前から……同じ小石が同じところに、同じ草が同じところに同じ垂れ方で、同じように水面が揺れて輝き、同じ土の乾いたにおい……私は同じところで同じ時間を、繰り返し、繰

り返し、繰り返してきた。全て同じ記憶、同じ思い、同じ気持ち。私は、出来上がった絵の物語の中でずっと存在していた。私はこの世界で、ずっと立ち尽くしている傍観者だった。

そして、確かに音を聞いた。その音は、物語から逸脱していた。何故なら、その時初めて、音、というのを意識した、実感した。音、草の擦れる音、その鮮やかな細い音に驚き見ると、草の中にポツンと小さく色付いた綺麗な白兔を見た。

白兔は少女を見ていた、少女も白兔を見ていた。白兔は前を見た、少女も前を見た。白兔はひとつ跳ねて、少女も一歩歩んだ。白兔の真似をするように、少女はトコトコと、湖を岸に沿って歩いていき、大きく回っていった。

もう学校は対岸に小さく在る。白兔はずっと背中だけをこちらに見せていた。そしてそのままその可憐な姿は、山側の傾斜の草むらの中に飛び込んだ。

別に道も穴も無いような、ただ濃くびっしりと緑が生い茂って壁になっている。その先を遮るように、そびえる深山の壁。その境界線を、少女は跳んだ、飛び込んだ。

03：石室く少年く会話く願ひ（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

03：石室へ少年へ会話し願い

光は背中の方へ一瞬で飛んでいった。消失。そして暗黒から次第に滲み出るように、眼の上に浮かび上がった光景は、細い深い穴……滑らかな蒼い草の坂道だった。天井には星のようにきらめく日差しの粒が瞬いている。みっしりと生え伸びた草が、トンネルのように丸く細い道を作っていて、下へ下へと降りている。右から左からと迫る草が重なり合って縞を作り、柔らかい温かな凹凸の管の中を、物凄い速さで駆け降りていく。その遙か先に、あの白兔の点が見える。真っ直ぐ、真っ直ぐ、降りていく。

初めはちょうど体を通るくらいしかなかった穴が、次第に左右が開けてきていた。坂はもう大分なだらかになっていて、ちょうど草の半球の内の部分を底へと、歩くくらいの緩慢さゆつたりと降りていた。

天井はずっと高く、ほとんど光を通さない。薄暗闇の中を、白兔の背中だけが光っていて、それを頼りに進んでいく。そして、やがて白兔の向かう先が現れてきた。

それは大きな石で出来た室だった。まだ遠くにあつた時には、何か地面からボコリと浮き出た出来物のような塊のように見えた。次第に視界に大きくなってくると、大きく四角く切り取られた、不恰好な石の部屋だった。入り口らしい黒い穴が開いている。ちょうど坂が終わった、半球の底の真ん中に、それは鎮座している。

少女が一番下まで辿り着く前に、白兔は既にその中に入ってしまった。完全に下まで滑り終え止まってから、少女はゆっくり立ち上がった。ジツとその室の黒い穴の中を見つめる。

辺りは半球の草の坂が四方に広がり、それが集束する一番底に、この石の室だけが在る。太陽の光は無い。天井は全く陽が差してなくて、複雑に先の細い葉が敷き詰められるように……縫われた布の

ようにみつしりと覆われている。なのに、その中は極めて薄暗いものの、中の様子は不思議と見えた。それは、周りの青草自身が、薄っすらとほのかな明るさを持っていたからだ。黒い緑色の明かりに照らされて、白いドレスと白い肌は染められた。

そして、この中でなお暗いところ……室には光が全く存在しない。“室”の中……その小さな中は、広大無辺の空間が広がっている。その黒い穴……無限に圧縮された空間の中に入れば、たちまち果ての無い宇宙の中に落ちていき、自分の存在は目にも見えない、感じ取ることも出来ない程の極小となる。いや、そこには“自分”という存在も無くなるかもしれない。天も地も無い世界が、そこに在ることを感じ取った。

「早く入ってきて」という声が穴から響いた。その切望の言葉は、石の口が喋ったように聞こえた。石に向かって答えた。

「入っていいの？」

「入ってきて欲しい。ここに居て欲しい」

「あなたは誰？」

「君こそ誰？」

同じことを自分に返されて、少女は無性に寂しく感じた、無性に悲しくなった。その言葉はあまりに冷たく響いて、自分が独りぼっちにさせられたような気持ちになったからだだった。そしてそれは、きつと、目の前の声の主も同じだった。だから余計に悲しくなった。「私も、あなたにここに居て欲しい」

闇の中は、不思議な温かさがあった。空気は粘度を持ち絡み、息を吸う毎に身体に入り込んでいく。それが換わりに中の冷たい空気を押し出してくれているように感じた。

一步一步確実に進んでいるはずなのに、前に進んでいる感じがしないのは暗闇のせいなのか。何処までいったら、あの声のところまで辿り着くのか分からなかった。けど、十歩も進まないうちに少女は止まった。そして、あの声はすぐ近くから聞こえた、そう感じた。

「楽にして、好きにして座って」

膝を曲げて、足を腰の下に折り込む。不意に、上下の感覚が分からなくなった。ここには“地”は無い。今、足のあった方は“何も無かった”かもしれない。足元の先を見た……ただ黒いだけの虚無。少年の声は、なお親しげな調子で話しかけてくる。

「僕はここにずっといなければならぬ、だから君がここに来てくれたことが本当に嬉しい」

「私も、私のことを思ってくれる人がいてくれて、とても嬉しい」少女は闇に包まれて、闇と会話をした。少女は、何処を向いても、どんな格好でも、どんな調子でも、好きなように話すことが出来るのが嬉しく感じた。少女は何も考えずに、思うまま喋ることが出来た。少女の発せられた言葉は、闇の中全体に拡散し通り、その中に溶け込むように響き渡った。そして闇からの声は、少女の周りの空気全体から送られてきて、全身を震わすようにして伝えられる。耳ではなく体で、少年の言葉を聞いている。少女は内から外側へと、闇は外から内側へと、声を送った。

「また同じ事を聞くけれど、あなたは誰？」

「僕はここにずっと“居る”。僕は、僕が存在した瞬間から、ここにずっと“居た”んだ。そしてここから“皆”を見つめている。ここから先の昔話は、少し長くなるんだけど、聞いていてくれる？」

少女は頷いた。闇で姿は見えないけれど、それを感じ取ってくれと思うた。

「僕は生まれてからずっと、闇の中に居る。いや、というよりも、闇そのものが僕なのかもしれない。僕は僕自身に触れることは出来ない。闇という形の無いもの、それが僕自身だった。そのことは、この頃ようやく自分で分かってきたことなんだけれど。」

僕はいつも夢を見ていた。僕は色を望んだ。最初に望んだ色は、青だった。一面に青が、微妙に濃淡を作って、何処までも広がっている光景だった。所々に白く抜けたところがあって、そこから風が

生まれ、何でも運ばれて何処へでも自由に行ける。空、雲だった。

そして次に、僕は新たな青を望んだ。空の青は、虚無だった、それはある意味で、僕自身を映し出したものだった。今度の青は、感じることの出来る、触れることの出来る、実体の在る青が欲しかった。それは自在に形を変えることが出来る。冷たさをもち、熱さをもつ、確かな姿を持つ青が欲しいと思った。海だった。

そして僕は、そこから先を躊躇った。それらを明るく照らし出す、光を生み出すことを。光は、恐れだった。だって、それは僕とは全く反対の存在だったから。もし光を生み出したなら、反対に僕自身は消えてしまっただろうから。すると……空を望んで、海を望んだ、僕は一体なんだったのだろうか、凄く切ない気持ちになった。僕はそれらに触れるどころか、見ることも出来ないんだから。

するとその時、何かが僕に伝えてきたんだ。それは言葉じゃない、はつきりとした形じゃないけれど、とても熱心な意思が伝わってきたんだ。そして僕はその意思を呑んだ。すると僕は、いつの間にか、この石の室の中に居たんだ。ここが、僕の存在し得る場所となった。僕はこの石の中に棲み続けている。石は、僕を包んでくれている。“僕”という“もの”を、石が形としてそこに纏めてくれる存在だった。

その見えない“意思”は、君をここまで導いてくれたものだよ。僕はそれを、兎と名付けた。名付けただなんておこがましいけれど、それはその名を受け入れてくれた。でも君が見たその姿は仮のものだから、僕は仮の姿に“兎”と名付けた……といった方が正しい。今はもう元の“光”となつて、世界に戻っていったけれど。

“兎”は僕の居場所を作ってくれて、そしてそれはそのまま光となつて空へと昇り世界を照らし出した。太陽だった。

けど、けど僕の飢えは満たされなかった。美しい世界だった。輝きと喜びに満ちている世界。けど僕は、更に望んだ。その世界に、僕は立つことが出来ない。だからその代わりに……もう一つの僕となる存在を、その世界に立たせたかった。

だからまず僕は、地を作った。その世界に立つて歩けるように。海を囲むように地を作り、漏れてこぼれてしまわないように周りを高くした。そしていよいよ僕はその中に、意思を持ち、思考し、自由動くことの出来る存在を作ろうと思った。

僕は風に祈った、海に祈った、土に祈った。風は海と土を巻き上げて、捏ね上げられて、形作られていった。僕が夢の中で見た、僕自身の姿を想像して。手足を、指先や髪の毛、頭を作った。そして最後に残ったことは、その体に命の熱を送り込むことだった。

僕は最後に、空の“太陽”に、この土の人形に生命の力を与えて下さいと願った。太陽はたちまち大きくなっていき、光が大量にこぼれ落ちる雨のように注がれた。辺りの景色が白んでいって、そこに在る姿は形と色だけになっていった。青い、青い海、空、青い……青と、緑、色の重なり。海と空は同じになり、天地は消えた。

土人形は、黒い靄が全身から染み出した。すると土は溶けていき、空や海の青色の中に、混じっていった。そして黒い靄は、モクモクと活発に膨らんだり縮んだり膨らんだり……やがて一定の形にまとまっていった。おぼろげな輪郭を持った、黒い靄の存在が現れた。それは確かに生きていて、わずかに全身の上下の律動が見れた……

「黒い影は夢見ている、黒い影は自分自身を夢見る、黒い影は友達を夢見る、黒い影は昨日を夢見る、黒い影は明日を夢見る」

「でも、黒い影は、鏡に映らない。黒い影は、記憶を持たない。いつとなく現れて、いつとなく消えていく」

少女は悟り頷く。

「そして、私は、鏡なんだ」

「君なら……もしかしたら君なら、“皆”に何かしてあげられると思った。だから、君をこの世界に生み出した。僕の代わりに、“皆

”に、その姿を映してあげて欲しい、記憶を刻みつけてあげて欲しい。黒い影たちが、この世界から消えてしまっても、覚えている何かがあるように……」

04：失敗〜お婆さん〜鬼ごっこ〜出発（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

04：失敗くお婆さんく鬼くつこく出発

今また始まるうとしている、日常。黒い影はいつものようにたむろして、砂利を蹴つて土埃を上げながらやってくる、その中にその時少女はいなかった。黒い影たちは、校舎の入り口に立つ少女を見つけて、その前で立ち止まった。少女の微笑みが、黒い影を少し揺らめかせた。

「さあ、遊びにいこう」

皆の好奇心が少女に注がれていることがはつきり分かる。黙ってついてきて、少女の顔を横から覗き込むようにしたりする。はやるように足取りは細かく速く、湖の周りに沿って歩いていき、やが緑の淵の穴のところまでやってきた。

振り返って、皆の顔をジツと見る。背の高い奴、低い奴。はしゃいで跳ねる奴、大人しく静かにについている奴。でもその姿から一瞬でも目を離して、再び目を合わせた頃には、もう誰が誰なのかが分からなくなる。黒い影は幾つもそこに在って、立っていて、消えては、現われ、でもそれは消えたものとまた別で……

目を離さなくなつて！ 目の前で、影たちはすぐにかき消えていく、現れる、消えていく、現れる、消える、消える、消える……待つていることは出来ない。

緑の穴へ行く、皆一緒に……しかし結局、それは少女一人だけだった。少女の白いドレスだけが、その壁を通るのを許された。

少女は消沈し、寂しく、恐る恐る石の室を見る。そして中へと入る。

「僕に会わせようとしてくれたのかい。それは嬉しいけれど、無理だよ。皆は明るい太陽の下でしか存在できないんだから。あの緑の壁は越えられない、皆も、僕も」

「私、何をしてあげたらいいのか分からない。皆にとって何がいい

のか。ただ皆と一緒にいて遊んだりしているだけなら、前と変わらないと思う」

「遊ぶっていつても、色々あるよ。皆で一緒にする遊び。学校のお婆さんに聞いてみなよ。遊び、お話、知識、何でも知っているんだから」

いつもの、学校でのお婆さんのお話の後、皆と一度一緒に校舎を出た。しかし入り口で少女は立ち止まって、皆が湖に行ってしまうのを見届けた後、再び校舎の中に戻っていった。

暗い廊下を抜けて、いつもの教室に入ったはずなのに、扉を開けた先には、足元から砂利を踏む音がした。崩れた柔らかい小石ばかりが閑散と転がる、荒れた野原になっていて、辺りが暗過ぎて少し先をうかがえない。かろうじて近くが見えるのは、平たい大きい石の上に座るお婆さんの脇に、地面に突き刺された松明の明かりが辺りを照らしていたからだった。

そしてここは、外の世界とは全く違う空間であることを思い知らされたのは、あの太陽の気だるくなるような暑さが、ここには全く無かったからだった。暑くもなく、寒くもない。ここには空気の寒暖が無かった。それは何ともいえず不思議であり、また少し恐くもあつた。

恐さは、お婆さん自体にも言えた。いつもは地味な着物を着込んでいるのに、まるで正反対の真っ白い装束姿だった。腕やすねをさらけ出した、布地の少ない無駄の無い作りで、左の二の腕には黒い布の帯を何重かに縛り付けていた。無秩序にボサボサに立った髪の中には、角が生えていてもおかしくないような雰囲気、そのいでたちから醸し出していた。そして少女のことを、睨むように見つめていた。さっきまでのお話の間、一度も目を合わせてもらえなかったことを少女は思い出す。

少女はお婆さんの前までやってきた。しゃがんで足を崩して地面にベタリと座り込んだ。依然としてお婆さんは黙ったまま睨み続けている。少女もお婆さんの眼の中を覗き込んだ。黒い瞳には光が無く、のっぺらとして、色を感じさせない虚無の穴のようだった。段々とその無の空間は広がっていき、少女の視界を呑み込み、やがて少女は闇の空間の中に落ちていた。

そして、見た。一面闇の世界の壁に穴が開いたように、光の点が浮かび上がり、徐々に丸く大きく開いていった。そしてその光の中に絵が動いていた。絵は人の姿、同じくらいの子供たちが何か騒いでいた。

輪になって言い合っていたかと思うと、一人を残して一斉に他の子たちが四散していく。足の速い子はもう豆粒ほどに遠くまで逃げてしまう。しばらく経って、ようやく残った子が走り出した。少しずつ近付いているのに、一方の子は更に遠くへと逃げていつてしまふ。どれだけ走っても、どれだけ経っても、二人の間は一向に縮まらない。やがて疲れて足の鈍くなった追いかける子が、歩き始めてしまつと、一方の子は更に足早に離れていつて、ずうつと遠くへ行つてしまつた。

そして疲れた子は、何度もゆっくり息を吐いて整えていて、次第に落ちて着いてきたら……“私”を見た。その子は歩き出して、確かに“私”を目指していた。私は一瞬の迷い、そして離れるように歩き出した。その子は走り出した。私も走り出した。でも私は、本気で走らなかった。待つような気持ちで、その子が少しずつ近付いているのを感じながら、でもその子とは反対の方へと走り続けていた。急速にお互いの距離は狭まっていく。そしてその子の手が、私の腕に触れた。途端に、その子は反対方向に……さっきまで近付こうとしていたのに全く逆に、離れていった。私はすぐに追いかけるようにした、けど足がすくんでぎこちなく戸惑っている。その子はどこまでも遠くへと逃げていつてしまふ。でも私は、それを追い掛ける

ことが出来なかった。

しかしやがて私は、走り出すことを決めた。必死になって追い掛けようとした。皆は速くてどんどん遠ざかっていく。でも走った、走り続けた。

待って、待って、待って、待って、待って、……その言葉は、私に対しても、別のところから聞こえてくるようでもあった。私はその言葉につき従うように、地を蹴って、体を前へ前へと跳ばした。そしてようやく、ようやく、わたしはようやく、その子に追いつこうとしていた。私は決して速くはなかった。その子が疲れていたわけでもなかった。私はその子に近づこうとして、その子も私に……私の方は決して見ないけれど……向こうの方へと走りながらも、こちらへと近付こうとしていた。だから私は諦めずに、その子の方へと走っていきこうという気持ちを保っていられた。

そして、捕まえた。するとその子は、ピタリと止まってくれた。そして振り返った。その子は、歯を剥き出して笑いながら、私のお腹を小突いた。私もつられて笑った。すると彼は、もっと笑った。そして、……「ありがとう」、確かにそう言って、彼の姿は真っ白くなっていき、そして徐々に奥の背景を透かしていつて、やがて消えていった。

太陽の白い光が濃い。目の下の厚ぼったさを感じ、刺激され、涙が出てきてしまいそうだった。更に白い砂の色は飛んで輪郭を消し去り、空も海も、全てが白くかすんでいく。

白い景色は、ほんのわずかな濃淡があつて、それがもやもやと蠢いている。腕の辺りに弱い風を感じる。それが突然強まったかと思うと、白は凝縮を始めて、攪り纏まっていき、一本の線を作る。その白の先はずっと長く続いていて、赤い一点の方へと細く伸びている。

そして今は世界が、光と闇が反転している。少女は闇の中に居て、唯一目に映るのは、小さくともる火と、白い煙。煙草をくわえた主

は、そのままため息と一緒に白い煙を吐いた。その煙が飛散してしまつと、赤い光は下の方に落ちていった。そして地面に擦りつけて消してしまった。もう何も見えない。

お婆さんは泣いている。

「なあ、あの子は元気だったかなあ、教えてくれよ、あの子はどうだったのかなあ」

「元気に皆と遊んでいましたよ。足が凄く速くて、私はあつという間に追いつかれてしまいました」

「でも、もうどこにもいない……いない……」

「お婆さん、手を出して」

そして少女は手探りで闇の中を、お婆さんのかさついた手を見つけた。氷のように冷たいその手を強く握ると……（お婆さんもしっかりと握り返してきた……決して外れないように……離さないように）……溶け出して、少女の手を温かく濡らしていった。

やがて闇と沈黙の中に、少女の息だけが静かに響いている。少女は濡れた手のひらで、頬をさすり、湿らした。

「皆に、会いに行こう。一杯遊んでこよう」

05：開始／木に隠れる影（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

05：開始、木に隠れる影

「鬼ごっこをしよう」

まだ太陽が真上で大きく赤く燃える頃、湖のほとりまでやってきて、大きな声でそう言った。皆は泳ぎをやめて少女を見て、びっくりして突っ立っている。

「こっちに来て一緒に遊ぼう」

少女は湖の隣まで近付いて、そう皆を何度も呼んだ。

黒い影は戸惑う素振りを見せながらも、湖から上がってこっちに来てくれた。影は少女の方を一齐に見つめた、少女の次の言葉を待っていた。

「じゃあ始めようね。私が鬼になるね。私が十数える間に、皆は私から離れるように逃げてね。十秒経ったら私は皆を追いかけるから。絶対に捕まらないように逃げてね。私も一生懸命追いかけるから。いい？」

少女は低くしゃがみ込んだ。

「いち、に、さん、」

そして一齐に影たちは、風のように四方に散っていった。中には一緒に逃げる者もいた。凄く速さで、学校の方、湖の向こう側……けれど湖の中へは誰も入っていかなかった。

「しい、ご、ろく、しち、はち、」

少女はわくわくして、膝を抱えながら、こみ上げてくる楽しさ、湧き上がり飛び跳ねたくなる体を必死に抑えていた。もう少し経ったら動ける、そうしたら絶対皆を捕まえてみせる。

「くう、じゅう」

まず勢いよく立ち上がった。そして周りを見回して、皆がどの辺りにいるのかをざっと確かめた。太陽は依然として暑く明るく照らしていて、景色が白っぽくモヤモヤとぼやけている。その中に皆の姿を見つけるのは大変だった。でも一人ずつ……確かめていった。

そして最初の目標は、木の陰に隠れた小さな影にした。ちょうど少女に対して、木の裏側に隠れていて、両腕を木の周りに巻いて、こちらを意識していた。

少女は駆ける。影は、逃げるような気配は見せない。少女が少し斜めから様子を窺おうとすると、影はそれにつれて反対の方にずれる。常に木の裏側に隠れようとしている。決してその姿をはつきりと見せない。

少女は両腕を大きく広げて上げて、そつと足音を殺しながら側まで近付く。そして一番近いところにある、樹木の前に置かれた両手のひらを、同時に触ってしまおうと思った。

一瞬の所作、一歩大きく素早く踏み込んで、同時に手を伸ばして、二人の距離を一瞬で消そうとした。

触ったと思った。けど実際は、少女は木に両手を回して抱きしめていて、その後ろの影はどこにもいなくなっていた。上を見上げた、けれどいない。木の側には少女の姿だけがあるだけだった。

少女は木の幹に口づけた。そして匂いを、木肌のゴツゴツした隙間の奥の匂いを嗅いだ。幹は一度弾むように表面が跳ねて、揺れ動いて、そして彼女を徐々に呑み込み始めた。幹がうねる毎に、少女は波の中へ、奥へ。そして、少女は薄暗い滲んだ世界に入った。

そこにいる影を、少女は見つけた。包むように抱きしめようとした。けど、影は両足を折って腕を巻きつけて、小さく小さく縮こまる。胎児のように小さくなる。そして触ろうとすると、一切手応えを感じることなく、少女の体の中へと入り込んでしまった。

影は震えていて、少女の胸の下辺りに居て、そこをくすぐっている。卵のように綺麗に丸くなって、静かに呼吸を繰り返している。ただ息だけを弱弱しくし続ける。

少女は出来るだけ影をおどかさないと、体のいたるところ

の動きを静めようと努めた。あらゆる体の律動をもっとゆつくりと……静めて、静めて、止めてあげる。少女の呼吸は、ほとんど止まりかけている。でも影の呼吸は、もう既に停止していた。

無音の世界で、二人は、少女は影の輪郭を、影は少女の内壁を、それぞれ感じ合っていた。影の輪郭は無骨で、岩肌のように荒くあちこちが角立ち、それが少女の内側を擦りつける。その執拗な刺激に、次第に熱と痛みが滲み出してくる。穴が開いてしまいそう。

影はまだ更に、際限無く縮んでいく。小岩から小石ほどに、更に礫、粉のように。そして小さくなっていく毎に、堅さが一層増し、同時に熱も激しく発していく。

胸の真ん中一点に、小さな太陽を抱えているような熱。激しく焼かれ、全てを消失させてしまうほどの熱。いつしか痛みの感覚を超越して、火で胸の中は空っぽになってしまう。

少女は手を扇いで、求めた。枯渴を埋めてくれるものを、命尽きぬために力を。

そして、少女の指先から流れ込まれたもの、水の冷たさに体は痺れた。指先と爪の間から染み込み、指一本一本の中を下っていつて手の甲、腕、真っ直ぐに水は身体を中心へと、滑らかに進んでいく。そして中心の洞へと行き着く。寂しい洞を淡々と埋めてくれる。熱は急激に冷やされていき、渦巻く猛りが鎮まると共に、青い水の中に泡が生まれ出した。泡は方向性が定まることなく不規則に水の中を奔る。その混沌の中に翻弄され泳いでいる塵がいる。凝結しているその塵は、言葉も無く、意志も無く、周りに任せて無心に無為に漂っている。

今にもすぐ、水の中に溶け消えてしまいそうだ。塵は次第に速度を高めていき、上へ上へと昇ろうとする。しかし水流は逆に下降の力を見せる。強烈な摩擦と圧力が塵に与えられ、極小の中でその身に歪みを生じさせる。でも抵抗し続ける。

少女はお腹に手を当てて撫でる、そして水流はピタリと止まって、

温度も温かくなった。勢いのついた塵は中で壁にぶつかりはねて、しばらく激しく内部をグルグルと回っていた。やがてその勢いも止まり、真ん中辺りで止まった。

そして塵は、膨らむ。小さい時はただの点に見えたそれは、大きくなるにつれて、手足や頭を見せ、指や目や鼻や口を見せ、人の形がはつきり現れてくる。まだ大きくなる、もっと大きくなっていく。影の右手は少女の右手と重なり、左手も左手と重なり、足も二つが同じように重なる。二人の身体は、全てぴたりと一致した。

影の笑みが、少女の顔に微笑みが表れる。影は右手を上げると、同時に少女の右手も上がる。今、少女は、影の身体と一緒にになった。影は喜びに躍り、少女の体を跳ね上がらせ、幹を辿って枝先へといたる。

ふんわりとした枝葉の上へ、体を横たえ寝そべる。

そして影は、少女に口づける。少女の唇の裏側に……影は内から、少女の唇の形に合わせ、重ねて。驚いた少女は、とっさに手で口を覆い、背中が丸まる、その時、影が少女の背中から弾け出るように抜ける。そしてそのまま背中から少女を抱きしめて、「ありがとう」と呟いた。

温もりのないその影は、少女の振り返りを待たず……そこには既に何も居なくて、大きな青空があるだけだった。

少女は木の根元で寄りかかるようにしていて、青い深い大空、彼方へと流れていく風の行く先を見つめている。

06：地面／コミュニケーション／終焉の予感（前書き）

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

06：地面／コミュニケーション／終焉の予感

遠くの方の、湖の際の土が、不思議に盛り上がっている。盛り上がりは、その下に何か生き物があることを示していて、不規則に位置が変わり動いている。ジツとよく眺めてみれば、それは地表に同化した影が、寝転がってモゾモゾと、右に左に地表を這っている姿だった。影と土は一つになって映る。

何か胸の奥の方をくすぐられたような少女は、素早くうつ伏せになった。手足をベタリと地面につけて、地面から水平にその方をそっと覗き見た。土の盛り上がり動きが止まる。

お互いがお互いを意識して、警戒し合っているのが伝わってくる。なおさら楽しくなってくる。絶対に捕まえてみせる、少女の気持ちは更に固くなる。

少女は右手を這うように、ゆっくり地面を滑らせた。

影は、動かない。

今度は、左手を。

まだ、動かない。

右、左、右、左、その姿は小さな爬虫類のように、細心の注意を払って、モソモソと近寄っていく。息を出来るだけ細めて、自分は石ころか土くれになり切る。時折止まって明後日の方を見たり、目をつむってみたりして。

狙い定めた餌にじりじり近寄る動物のように、互いの間に張られた糸を切れないようにと、様子を見ながら慎重にたぐるように、時間を掛け時間を掛けて、距離を零に限りなく近づけていく。

真上に、乗っかる。そこには、少女の姿だけのようだった。一人で地面に這いつくばっているだけのようだった。

白い地面を、細かい石ころや砂を、見る。小さな隙間の黒い無数を、見る。息を吹きかける。砂の一粒がそれぞれ渦に巻かれて、あ

る粒は縦に小刻みに震えるように跳ねたり、水平に舐めるように流れてなだらかな波を作ったり、地面に押さえつけられ少し苦しうにしがみついている、砂。

吹く度に、砂の表面の粒は、位置を変え形を変える。同様に、砂と砂の隙間の無数の黒い穴も、目にとまらない物凄い速さで……プツプツ……細かくあちこちに動いていく。

「見えてるよ」

黒い穴の奥に向かって、少女は悪戯にそう投げ掛けてみる。

しかし砂の向こうからは何の反応も来ない。

「ねえ、この壁は決して断絶してはいないよ。いつもどこかは繋がってる。私の体温感じる？」

そう言って少女は、砂の上に手の平を乗せた。そこから微かな呼吸の風を感じる。触ることは出来ないけれど、そこに居ることを感じることは出来るから、伝える。

「隠れていないで、怖がらないで出てきて。怖いのは、あなただけじゃないから」

砂の向こうは依然、沈黙し続ける。

少女は、手をつけていた腕を真っ直ぐ伸ばしていく、膝をつけていた足を伸ばしていく。肢体を緩め落としていって、ベタリと地面の上に、全身をくっ付けて寝そべった。少女が耳を付けた砂の面、そのすぐ裏側を擦る指の音が聞こえる。指が立てられ、とても静かに、こするというより、さすっているかのような音が、ほんの微かに聞こえる。

少女は指先で、砂越しに叩いて応えた。相手の指が砂面から離れたのが分かった。少女は自分のしたことを少し後悔した。

でも少女は、指で叩き続けた。ゆっくりと静かに、決して脅かさないようにと慎重に、二回のリズムで叩く。繰り返し同じテンポでトントン、トントン、トントン、トントン、眠りを誘うような優しいリズムで。

そのうち、指の先の砂の裏側に、影の手のひらが、こちらの指先

を受け止めるような形で、当てられていた。少女は更にゆっくり、指を当て続けた。トン、トン、トン、トン、トン。二回のリズムから一回に変えて。更にゆっくり、静かに。止まりかけるほどに、当てる一つ一つの音を長く伸ばすように。

そしてやがて、指はピタリと砂の上に止まる。砂を境に、二人の指と手のひらが、それぞれ向かい合う。

「見える？」

少女は体を少し横にずらして、背中の方の景色を砂面の前にさらした。

空の只中に浮かぶ太陽は今、まるで急速に高いところへと昇り詰めようとする様に、あるいは空の底へと沈みこんでいくように、その大きさを小さく一点へと集中していつていた。もうほとんど空の青色が、その遅い姿を呑み込んでしまっただった。消えゆくこととする最後のともし火のような太陽の光は、しかしまだぎりぎりの力を保っていて、潰れてしまう最後まで世界を照らし続けようとしていた。

空の青さは少し前よりも一層増していて、厚く何重にも塗りたくられたような濃さと深さを持っている。天の色は少しずつ黒さを増しつつあり、かつての目に沁みるような鮮やかさは徐々に失いつつある。

変化は、経過を物語っていた。変わらないものと思えたそれは、影の記憶が生まれる毎に、この世界の終わりへと近づいていく。でもそれは、元のところへと戻るといったことだった。全ての元は闇であり、徐々に闇へと還り始めていた。

少女は頭を上げて、辺りを、湖の上から、湖畔、学校の方、山の方、巡り見た。絵のように止まった姿があるばかりだった。今はもう、ずっと少女の声ばかりが湖面に硬く響いていた。

「寂しい」

その言葉は、少女の心の全てを表していた。この世界の終わりが

くることを、ある程度はずっと心に留めてはいた。でもこの時、少女は思ったことを素直に、率直に口にした。

指を開いて、手のひらを、砂の上に当てた。その反対側にある手と合わせるように。

そして口惜しそうに、砂の面を摩り始めた。二人の間の壁を削り取ってしまいたかった。何度も何度も擦り続けて、こちらの体温を相手に伝えたかった。細かく立った砂や石のつぶてが、手の皮膚につき立ち、執拗な刺激に徐々に痛みが出てきた。我慢できる程度にゆっくり摩り続けた。次第に感触が麻痺するようになってきた。手のひらを痺れさせながら、ずっと繰り返した。

やがて砂の面が、少し歪んだ。

初め気のせいかと思ったその感覚は、徐々にたわみが大きくなっていくことに気付くことで、確信の喜びを得た。裏側の突き立てられた影の手の指も、激しく砂の面を擦りつけていた。砂面は、柔らかい布のように、しかし決して破れない鉄のように、大きく湾曲し、揺れ動いていた。

二人は指を立てる。爪の間の痛み、むしろその爪で削るように砂に当てて、懸命に擦り続けた。しかし、どれだけ経っても、何も変わることは無かった。

そして影が、手のひらで柔らかく面を叩いた。もう止めよう、という合図であることに少女はすぐ分かった。その意思は伝わったので、だからすぐに少女も止めた。止めてしまったら、余計に悲しくなってきたしまった。少女は急速に、奥より込み上げるものを抑えることが出来ず、突然に、涙がこぼれた。少女は傷の付いた手のひらで、あえて涙を拭いて、その痛みを耐えた。痛みを与えて、自分を苦しめたかった。

そしてその痛みは、少女の意志を固く立たせた。自分に出来る精一杯を、起こしたかった。
「手を、強く当てて」

少女は涙を鎮め、地面を見つめる。二人は力を込めて、手をあてがった。砂と砂の間に、皮膚を少しでも押し込もうとした。もう少して二人は触れられそうなのに、あと少しがどうしても縮まない。ほんの僅かな厚みの砂の壁が、絶対的な距離を作り出している。

もっと押し込む、砂の間には黒い隙間があるのだから、こうすればきつと届く。力を込めて震えながら、あと少しを埋めるために、身体すべてを懸命に密着させて。

少女の前髪が、揺れた。さらに続いて、揺れた。そよいだ。それは影の吹いた息が、砂壁越しに、通り抜けて少女に届いたのだった。その唐突の感覚に驚いて、少女の息は一瞬止まる。しかしやがて少女は平静さを取り戻す。細く緩やかに届くその息に、温かさと共に安らぎを与えられる。そして今度は少女の方も、影の息が一旦途切れるのを待って、同じものを返す。頬や額を撫でるように、息を伸ばして触れようとする。

記憶を持たない赤ん坊が、眠りの間際、母親の腕の中であやされながら子守唄を聴いている、そんな優しい息吹きを、二人は感じ合っていた。

「さようなら」

二人はそう言葉を交わし、最後にもう一度、砂壁越しに手を合わせた。影は地の底へと吸い込まれていくように、奥の闇の中に消えていった。

少女は体を起こした。少女はまた、涙を流していた。けれど、目のまぶたはもう腫れてはいない。涙は細く静かに垂れ続けている。ほとんど切れそうなほど薄く、いつまでも続いている。枯れることを知らない大地の生命力、染み出る山河の源流のように、弱弱しくも淡々と。

けれど、もう今はただ、涙を流してばかりではいけない。雫を落としてばかりではいけない。涙は、それをすくい、与えるためにあるのだから。決して無駄にしてはならないから。

07: 走る、一緒に帰る(前書き)

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

07：走る、一緒に帰る

空が、くすんでいる。所々まだらに染みのように、黒く色濃くなっている、それらが隣り合う辺りの色が滲んで、濁った灰色のような色合いを作っている。それが灰色の不透明な膜のようで、空一面に重々しく垂れ込めている。

そして空に太陽は、もう無くなっていた。恒久だと思われた光の力は、その永遠を否定した。けれど今はまだ、それまでに空に込められていた分の光を、下の大地へとわずかに放散させていて、世界は精一杯に照らされている。そして地の白い砂が、それを無駄なく空へと再び反射させて、また光は空の中へと飛び立っていく。こうしてまだ何とか、光は在り続けていた。

今にも潰えてしまいそうな光がまだあるうちに、急がなければならぬと思った。

踏み出す足音が、カツンと冷たい音を出す。地面の土が恐ろしく硬く、その異質さに肝を潰される。

水際に沿って、野原を走る。草むらを踏みしめる……草の上に乗って、走っていく。跳ぶ毎に、景色の物の輪郭が歪んだり、ねじれたりする。走り出したばかりだというのに、息切れが激しい。無機質なガラスのような世界の中を、学校めがけて走る。

そして校庭の窓越しに中を覗く。真っ暗で何も見えない。両手を開いて指を立てて、窓に指を当てようとした。指は窓ガラスの境を越えて、手応え無く、闇の中へと浸かる。指先にヌルリと濡れた感触。生温かく脈打つ。手を抜き出すと、湿ったと思った手は何ともなく、乾いている。

暗黒を内に抱えるこの建物は、周りの今にも崩れ消えてしまいそうな青い景色の中で、唯一しっかりした存在としてそこにあり、根を張っている。

あちらこちらが、壊れそう。今にも、青空に亀裂が入る、湖が蒸発する、山々が溶けそう。そして、私も、消えてしまうのだろう。描き出された絵の一部一部が、結晶が崩れて剥がれ落ちるように、取れ消えていく。その前に、間に合って欲しいと願う。

少女は走る、走る、走る、砂を蹴り、草を踏み、一足飛びで草の密生する山々の壁へと辿り着く。落ち着く時間は無い、間髪をいれずに、穴の中へと飛び込み、その奥へと落ちていく。速度は一気に上がり、お互いの距離は一気に縮まる。

穴は徐々に垂直になっていく。滑る速度は増していく。擦っていた背中ほとんど浮いてきている。地との間を、フワフワと着いては離れてを繰り返す。更に、更に、真っ直ぐ、真っ直ぐ、真っ直ぐと。

そしていつしか地は、背中から消えた。触れるものは何も無く、今はもう空間の只中に、身を浮かばせている。黒い闇の世界の中に、少女は浮かんでいる。頬を撫でた、髪をそよがせていた風も、いつしか消えて…… 空気さえ無いようだった。

「ねえ、いるんでしょう」

言葉は暗闇の中に、幾つも重なり、膨らみ、全体に満ちていく。

「うん」

か細い声が、小さく真っ直ぐ返ってきた。

「行こうよ、空の下に、まだ間に合うから」

「無理だよ、僕は、ここから一步出たら、消えてしまう」

「大丈夫、私の内側に入ればいい。私の中にいて、守ってあげる。一緒に行こう。来て。ね、まだ間に合うから」

空気が微かに渦巻いている。迷っていることは伝わってくる。

「見て」

少女は右の手を握って丸めて、下に差し出した。そして手を開い

た。すると、手のひらの中には、光が在った。その五指、掌は、闇の中に唯一、輝いていた。

そして人差し指と中指を伸ばして、滑らかに撫でるように左から右に一線引いた。するとそこには、青い色が現れた。少し下に手をずらして、また少女は影を拭う。さらに青い色が現れ、所々には薄っすら白い雲も現れた。

「私が、あなたを全て受けてあげる」

ひと拭い、ひと拭い、黒い影は少女の手の中に、吸い込まれていく。そしてその裏側に隠れていた景色が……空、山、そして湖、今に涙が出てしまいそうなほどに愛しい色が現れてくる。少女は最後のひと拭き、地面の砂が現れる。

しかし景色はもう、ほとんど原形を残さないほどに、緩く溶けてきていた。空と湖だった大きな青色の中に、山の緑が流れ出していた。交じり合った部分が何かの反応のように、ピカピカと白く鈍く光る。その力でそこは極度に膨らみ、圧力が掛かり、今にも割れて崩れてしまいそうだった。

「僕は結局、完全な世界を創れなかった」

その様子を見て、少年はそう漏らした。

「影たちがいなくなれば、この世界は均整が取れなくなってしまう。世界が生まれてからずっと……時の経過毎に、青空はどんどん大きく、広くなっていった。それを影たちが、大地で支えていた。しかしもうそれを支えるものがない。

そして、影は太陽の化身。影も太陽もいなくなった今、いずれ光は完全に、一切消えてしまうだろう」

「なくならないよ」

少女は穏やかに囁いた。

「そんな、だって今にも崩れてしまいそうじゃないか。空も、海も、山も、なくなってしまう」

「形のあるものは消えていく、そうかもしれない、けれど光は、生き続ける、在り続ける、見てて」

そして少女は、走り始めた。三つが入り混じった色の中へと、飛び込んでいく。スピードが増していく毎に、少女の身体は眩く輝く光へとなっていく。少女と色が溶け混じり、さらに滲んでいく。そして一つの色へと、透き通った青色となる。

青、青だ、この世界は青だ、全ての色の基は青で出来ていている。青はいつまでも、仄かに輝き続けている。

「さあ、帰ろう」

そして少女は、青色の中心へと歩いていく。少年の影を背負いながら、深い中心へと歩いていく。

そこには黒い大きなものが在った。もはや壁も窓も無く、ただそこに色濃く在り続けているところ。

「ただいまって言って、帰るんだよ」

そして少女は、黒い中に両手を差し伸べた。手を、腕を呑み込んで、繋がる。そして身体の中の少年の影は、そこへと滑らかに流れ込んでいった。

全てが少女から抜ける寸前、少年は指先でわずかに少女を押して気持ちを表した。少女は心から喜びを感じた。

08:in blue (前書き)

もし機会があるなら音楽を、PINK FLOYD「Wish You Were Here」、NICK DRAKE「Pink Moon」、MY BLOODY VALENTINE「Loveless」などを聴きながら読んでみてください。それらを流しながらこれを書いていました。

08:in blue

青の中にいる、泳いでいる。

青に溶け込んでいる太陽が、最後に少女に言った。

「忘れないでくれ、青のことを、光のことを、いつまでも、いつまでも」

「この世界はずっと在り続けます、いつまでも青く、輝いていて、希望であり続けます。では、行ってきます」

赤ん坊の泣き声

小さい、か弱い声がする

遠大な宇宙の中の、小さな青い星に一人、泣いている
泣いている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230i/>

in blue

2010年10月8日15時25分発行